様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０４３４７

研究課題名（和文）中国台頭の国際心理：アジア太平洋地域におけるポスト冷戦世代の中国認識を中心に

研究課題名（英文）Perception toward the Rise of China in Comparative Perspectives: Focusing on the Post-Cold War Generation in Asia-Pacific Region

研究代表者
園田　茂人（Sonoda, Shigeto）

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：１０２０６６８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,300,000円

研究成果の概要（和文）：2020年度には、アジア域内のポスト冷戦世代に見られる対中認識を中心に、それぞれの国・地域に見られる対外認識の特徴、及びその変化の様相について、『アジアの国民感情』（中央公論）という本を刊行した。同書は、第16回樫山純三賞一般書賞・最終選考対象作品となり、韓国語への翻訳オファーを受けるなど、反響が大きかった。また、オーストラリアと日本における中国系移民二世を対象にしたインタビュー結果の論文を執筆し、それぞれ中国語と英語のジャーナルに投稿する準備を行った。またプリンストン大学現代中国センターの研究グループと共同研究を始め、2021年度の本の刊行に向けた活動に着手した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
対外認識という、国の外交・対外行動を説明する際に重要でありながら、今まで必ずしも可視化されず、断片的な知見が得られていたにすぎないアジア太平洋地域の状況を総体的に把握し、その対中、対日認識や特徴などを、一般読者にもわかりやすい形で成果をまとめることができた。また、日本の文化外交を担う国際交流基金のスタッフに成果を研究成果を伝えるばかりか、その活動策定の際のアドバイスをする機会を得た。

研究成果の概要（英文）：In 2020, the book, which focuses on the post-cold war generation's views of Asia, especially those of China, titled "National Sentiments in Asia" (Chuo Koron Publishers) was published. This book was nominated as one of the candidates for Kashiyama Junzo Award 2021, received a lot of attention, including getting offer from South Korea to get it translated into Korean language. Two papers on second generation of Chinese immigrants in Japan and Australia were written, and each of them is now under the review for journal article in Chinese and English. The researcher started to work with research team in Contemorary China Center at Princeton University to publish an edited book in 2021, focusing on the global views of the rise of China.

研究分野：地域研究、比較社会学

キーワード：中国台頭　国際心理　アジア太平洋　比較　ポスト冷戦世代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

中国の台頭は、広く世界の社会科学者の注目を浴びてきた。国際関係論は、中国の安全保障政策や外交戦略、覇権の移行、「一帯一路」など新たな地域協力枠組みなどを問題にし、国際経済学は新しい分業体制のあり方や対中進出事業のリストラクチャリング、中国企業の海外展開などを問題にする。ところが、これらの領域は密接に結びついており、「政治経済」的アプローチに還元できない「社会心理」の領域が存在する。

中国の台頭をめぐる最大のアポリアは、中国自身の意図と周囲の理解・評価との間に大きなギャップがあり、それ自身が多くの問題を生み出していること、とはいえその両者を架橋するための知的営為が少なく、社会心理を正面に据えた研究が欠落している点である。特に安全保障をめぐる議論にあってはリアリスト的アプローチが支配し、パワーシフトをめぐる認識がいかなるものかについての研究は、圧倒的に不足していた。

近年、こうした状況を反省し、認識や感情がいかに国際関係を作るかといった研究も生まれつつある。ところが中国をめぐる研究となると、Biwu Zhang (2011), *Chinese Perceptions of the U.S.: An Exploration of China's Foreign Policy Motivations*, Lexinton Books や Peter Gries (2014), *The Politics of American Foreign Policy*, Stanford University Press など、その研究例は少なくなる。

他方で急速に進みつつある研究領域もある。ICT 技術の進展により、世界規模での世論調査の実施が容易になり、Pew Research Center や環球時報などのシンクタンクや新聞社が、台頭中国をどう見るかについての世界規模での質問票調査を実施するようになっている。日本では言論 NPO、韓国ではアサン政策研究院、香港では香港大学民意研究計画、台湾では国立政治大学選挙研究センター、フィリピンでは Social Weather Station など、アジア各地で、それぞれ自国の対中評価や対中イメージを炙り出す質問票調査を実施しており、台頭中国をめぐる社会心理を分析・理解する環境が整いつつある。

２．研究の目的

もっとも、これらを本格的に比較し、台頭中国をめぐる周辺地域の認識がどのような力学によって生まれているかを分析した研究例となると、研究代表者が編集を行った『連携と離反の東アジア』（2015 年、勁草書房）や『チャイナ・リスクといかに向き合うか』（2016 年、東京大学出版会）以外に例がない。

本研究は、調査対象者を「ポスト冷戦世代」に絞り込み（そうすることで世代効果と階層効果をコントロールするためである）、量的データや質的データから彼らの台頭中国をめぐる認識を、比較・交渉・変容の視点からアプローチする。そうすることで、中国の台頭をめぐる研究上のギャップを埋めることに本研究の最大の目的があり、そのオリジナリティがある。

具体的には、中国以外に、日本、韓国、台湾、香港、フィリピン、タイ、ベトナム、マレーシア、インドネシア、シンガポールの有力大学で学ぶ学生を対象に質問票調査を行い、その時系列的分析（第 2 波調査の結果との対比及び分析）とともに国際比較を進めることで、社会心理のダイナミズムを捉えると同時に、同じポスト冷戦世代でも、中国からの移民としてホスト国で育った第二世代に注目し、彼らが非中国系学生や高校まで中国大陸で育った留学生と、どのように異

なる対中認識をもっているかについて、日本とオーストラリアをケースに比較分析を行った。

３．研究の方法

2018 年にアジア学生調査第 3 波調査が実施され、アジア域内（具体的には日本、韓国、台湾、中国、香港、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポール、フィリピン、ベトナム、ウズベキスタン、カザフスタン）の有力大学で学ぶ学部学生を対象に、合計 6000 近いサンプルを集めることができた。本研究では、第１波調査（2008 年：3200 サンプル強）や第 2 波調査（2013 年：5000 サンプル弱）と比較できる地域は比較しつつ、特に中国の台頭をめぐる評価がどのような要因によって説明できるかを分析した。

同時に、日本では東京大学、オーストラリアではシドニー大学といった有力大学で学ぶ／学んだ経験がある新移民の第二世代（30 名）を対象に、彼らの中国の台頭に関する認識や評価を半構造化インタビューによって明らかにするとともに、その特徴を、特に中国の学生のそれと対比しつつ、どこに違いが見られるかを明らかにした。調査の実施にあたっては、みずから移民経験をもつシドニー大学の Chen Minglu 准教授を調査パートナーとし、データの獲得からその知見の解釈まで、ご助力いただいた。聞き取りにあたって回答者が使いやすい言語（英語、日本語、中国語）を利用したが、その聞き取り結果については英語で共有し、成果公開の際に利用しやすくなるよう工夫した。

アジア学生調査については、データ収集に係わったアジアの若手研究者を中心にいくつかの調査チームを作り、チーム内で意欲的な分析を進めた。また申請者は調査結果を現地にフィードバックし、現地の大学生と意見交換をしながら、より現地の文脈に即したデータ解釈を試みた。対中認識について研究している世界の社会学者と連携し、我々の調査結果を開示しつつ、彼らと共同で研究できることを模索し、その結果いくつかの成果を上げることになった。

４．研究成果

調査結果は、すでに多くの形式（単著、編著、論文、ネットインタビューなど）で発表されているが、多くの知見の中で、えりすぐりのものを以下に３つ提示し、研究成果が実りあるものであったことを示したい。

（1）　中国の台頭が安全保障上の懸念や危機感を生み出しているかどうかで、中国の自国に対する影響への評価は大きく異なる

すでに第 2 波調査の際にも確認されていたが、今回の調査でも、中国と領土・領海上の問題を抱えている国（日本、フィリピン、ベトナム）や中国の政治的干渉によって社会が変化している地域（香港と台湾）では対中認識は厳しくなっている。他方で、投資や観光、貿易など経済的な結びつきが歓迎されている地域（タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、カザフスタン、ウズベキスタン）では総じて対中認識は肯定的で、「中国の台頭が多くの機会を与えてくれる」という文言に賛成する傾向が強かった。

（2）　米中対立が深刻化する中で、アメリカの影響力が残るとする意見と中国の影響力がアメリカを凌駕するという意見が分かれており、この点の評価は中国の自国に対する評価の

良否と関係している。しかし、自らの直接的な利害が係わる人生の選択（就職、留学など）をめぐっては、中国がアメリカの影響を凌駕する傾向は全くみられない

この点は拙稿「アジアのエリート学生への調査から読み解く　2040 年、中国は覇権を握っているか」（『中央公論』5 月号、2020 年）で詳論したが、多くのポスト冷戦世代は、米中の影響力の変化は感じ取っていながらも、これを言論レベルのものと理解しがちで、実際の自らの行動変容をもたらしていない。特に米中の覇権交代に賛成する者の多い東南アジア地域では、こうした傾向が強く見られる。

（3）　日本やオーストラリアの中国系移民第二世代は、中国台頭の経済的側面については中国人学生に近い評価をするが、その政治的側面については意見が分裂し、どちらかといえば日豪に近い評価をする傾向にある

日豪の中国系移民第二世代は、基本的に似た特徴を示しており、両国間の違いはさほど見られない。中国の経済的台頭を肯定的に評価し、多くの機会が得られていると判断しつつも、その安全保障上の性格や中国の政治体制への評価となると、現地学生に近い特徴を示すようになり、結果的に第二世代内部に、中国の政治・経済に対する評価を巡る深刻な対立を生み出す傾向にある（図１、図２参照）。

図１　中国の台頭は多くの機会を与えてくれる

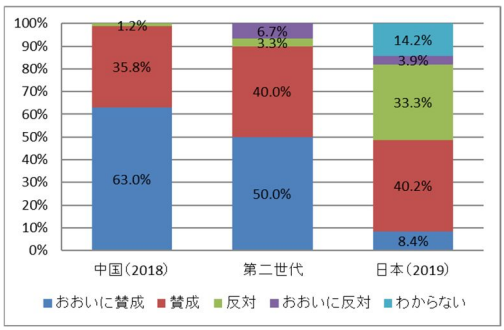
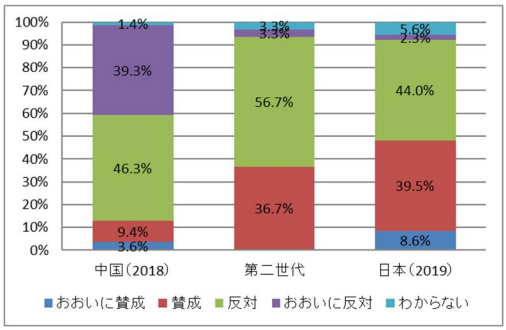


図２　中国の台頭は世界の秩序を脅かしている



以上の知見は、日本語ばかりか英語や中国語で発信され、大きな反響を得ている。研究成果をまとめた『アジアの国民感情』（中公新書、2020 年）は第 16 回樫山純三賞一般書賞・最終選考対象作品となり、韓国の出版社（景仁文化社）から翻訳が刊行される予定になっている。『世界の対中認識』（謝宇との共編、東京大学出版会、2021 年）は読売新聞で国分良成氏（前防衛大学校長）によって書評対象として取り上げられ、絶賛された。

データを共有して分析をした韓国やフィリピン、台湾、香港、インドネシアの研究者（総勢 18 名）からは、早くも「第 4 波調査を実施しないのか」という照会を受けている。台湾の研究者からは成果を英語の本として纏めるよう勧められており、ウズベキスタンの研究者とは共同で本を出版する計画を立てている。今後も、今回のプロジェクトで集めたデータを発表する機会は多くあるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 園田茂人	４．巻 279
２．論文標題 中国台頭の国際心理－アジア域内の温度差をめぐって－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社会学評論	６．最初と最後の頁 264-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 園田茂人	４．巻 11月号
２．論文標題 アジア学生調査第三波調査から見えてきたこと	５．発行年 2019年
３．雑誌名 UP	６．最初と最後の頁 18-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　5件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Shigeto Sonoda
２．発表標題 Sandwiched by China and Japan: Analyzing Perception toward the “Rise of China” by Second Generation of Chinese Migrants in Japan
３．学会等名 International Symposium Crossing Boundaries: Migration, Mediation, Morality（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeto Sonoda
２．発表標題 Asian Views of China in the Age of China’s Rise : Interpreting Survey Results in Chronological and Comparative Perspectives, 2002-2019
３．学会等名 International Symposium, "A Comparative Study of Asian Countries' Bilateral Relations with China: An Approach from the Four Factor Model”（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeto Sonoda
２．発表標題 Declining National Boundaries of Food Preference in Southeast Asia? An Analysis of Asian Student Survey Data, 2008-2018
３．学会等名 2019 International Conference on Chinese Food Culture（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 園田茂人
２．発表標題 アジアの中の国際心理
３．学会等名 トヨタ財団国際助成贈呈式講演（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeto Sonoda
２．発表標題 Asian Views of China in the Age of China’s Rise : Interpreting Results of Asian Student Survey, 2013-2019
３．学会等名 Annual Meetings of Taiwan Sociological Association（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeto Sonoda
２．発表標題 Asian Views of China in the Age of China’s Rise : Interpreting Results of Asian Student Survey, 2013-2019
３．学会等名 Manchester China Institute, University of Manchester（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
International Workshop on“Making Sense of International Perceptions in Asia”	2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関